学習課題の例	主な活動	指導プログラム 関連ページ	関連する教科等の学習指導要領	副読本の記載
				Ⅱ　中世（13～16世紀）の政治・社会 P10～11「鎌倉幕府の成立とアイヌの人たち」 P12「モンゴル帝国の成立とアイヌの人たち」 P13「明のアムール川下流域への進出とアイヌの人たち」

Ⅱ　中世（13～16世紀）の政治・社会

鎌倉幕府の成立とアイヌの人たち

源頼朝は、奥州藤原氏を滅ぼし、鎌倉幕府をたてた。その後、しばらくして幕府の実権は執権の北条氏に移った。北条氏は、鎌倉時代の早い時期に、ほぼ現在の青森県の範囲の地頭となった。北条氏は、津軽半島の十三湊（とさみなと）に根拠地を置く**安藤氏**を自分のかわりとした。この時代には、重い罪を犯した人を「蝦夷が島」に流刑（るけい）にすることになっていたが、それは、鎌倉幕府の仕事であった。安藤氏は、実際に流刑を行うという仕事を担当していた。さらに、流刑された人たちの管理も安藤氏の仕事であった。そのため、安藤氏は北海道にも影響力をおよぼすようになった。

14世紀の**『諏訪大明神絵詞』**（すわだいみょうじんえことば）という本によると、この時期の蝦夷は、「日の本（ひのもと）」「唐子（からこ）」「渡党（わたりとう）」の三つの集団からなると書かれている。このうち、「渡党」の言葉は、聞き取りにくいところもあるが、なんとか通じるとされている。しかし、「日の本」「唐子」の言葉は、全くわからないという。「渡党」は、主として北海道の南部に住む和人のことで、流刑者たちの子孫であったが、「日の本」と「唐子」はアイヌの人たちのことであろう。

諏訪大明神絵詞
『諏訪大明神絵詞』は、1356年に、長野県にある諏訪神社の円忠という人が書いた本で、安藤氏の内乱について書いたところに、蝦夷についての記録がある。「渡党」は言葉が通じると記されているが、その風俗には、毒矢を用いるなどアイヌの人たちのことと思われる記事があるので、「渡党」にはアイヌの人たちも含まれていたことがわかる。江戸時代のような、アイヌと和人というはっきりした区別がつかないのが、この時代の特徴である。

日の本
「日の本」とは東側という意味で、中国から見て日が昇る方角ということである。

図Ⅱ－1：「日の本」「唐子」「渡党」の位置図

写真Ⅱ－1：十三湊の航空写真

写真Ⅱ－2：十三湊の出土遺物

安藤氏は、北海道に住む和人を支配する権利を持っていたが、やがてこれらの和人が、アイヌの人たちとの交易を通じて手に入れた品物をあつかうようになった。このような北方からの交易品には、ラッコの毛皮や鷲・鷹の羽根、それに昆布や乾鮭などの海産物があった。安藤氏は、この交易を通じて大きな富を手に入れ、蝦夷管領（えぞかんりょう）とよばれるようになった。

また、交易の拡大にしたがって、渡党の居住する範囲は北に拡大した。江戸時代の松前藩の記録では、1457年に起きた、コシャマインの戦いの前までには、渡党が北ではヨイチ（余市）、東ではムカワ（むかわ）にまで住んでいたと記されている。余市川の河口には、交易所とおもわれる遺跡が発見されている。

安藤氏
青森県の津軽半島の十三湊に本拠を置く武士である。鎌倉幕府の執権である北条氏の家臣で、鎌倉幕府が北海道に対して行っていた異人の流刑などの任務の責任者であった。
安藤氏は、海の武士団として、海上交易などの利益で生活を立てていた。この時期に九州で活動していた倭寇とよく似ていることがわかっている。松浦党は、倭寇の中心である。
安藤氏は、15世紀には南部氏との戦いに敗れ北海道に渡ぼ、のちには秋田に移動して秋田氏を名乗るようになった。
なお、安藤氏は「安東氏」と表記されることもある。

写真Ⅱ－3：ラッコ

写真Ⅱ－4：鷹の羽根

オルチャ語とニヴフ語
オルチャはアムール川の下流域に住む民族で、サハリンのウィルタ（旧はオロッコと呼ばれた）などと近いことばを話している。このことばのグループには、17世紀に清をたてた満州人の満州語も含まれる。ニヴフ語（ギリヤークと呼ばれた）はサハリンに住む民族で、漁労を主な生業としている。ニヴフ語は、オルチャ語やウイルタ語とは違う。アイヌ語や日本語とも関係がないことがわかっている。

モンゴル帝国の成立とアイヌの人たち

13世紀のはじめにチンギス=ハンがたてた**モンゴル帝国**は、またたく間にユーラシア大陸の大部分を領土にした。チンギス=ハンの孫のフビライ=ハーンの時代には、中国風に元というようになった。元は中国の南にあった南宋（なんそう）を滅ぼし、東アジアの海に進出しはじめた。1274年と1281年に、元の軍が博多湾に押しよせた蒙古襲来（もうこしゅうらい）もそのひとつであったし、ジャワ島にも遠征軍を送っている。1264年からは、サハリンに進出し、骨嵬（こつかい）と戦っている。骨嵬とはアイヌの人たちのことであり、オルチャ語やニヴフ語など、サハリンやアムール川下流域に住む先住民族の言葉で、「アイヌ」を意味する「クギ」あるいは「クイ」という言葉に、音の近い漢字をあてたものである。

元は、サハリンに住んでいたニヴフの祖先を服属させた。その一方で、元の軍隊は、1264年から約40年間にわたって、北海道からサハリンへ北上してくるアイヌの人たちと何度か戦ったと、『元史（げんし）』に書かれている。しかし、その戦いはそれほど規模の大きなものではなかったようである。元がニヴフとアイヌの人たちとの交易をやめさせようとしたために起きたと見られている。また、サハリンからは、擦文土器がほんの少ししか発見されていないので、アイヌの人たちは、13世紀には土器作りをしなくなっていたと考えられている。アイヌの人たちがサハリンに定住するようになったのは、13世紀から15世紀初頭までの間のことであろうと考えられているが、まだはっきりしていない。

図Ⅱ－2：モンゴル帝国・元の時代の地図。
赤い線はアイヌの人たちが使った交易ルート。間宮林蔵も同じルートを使った。

モンゴル帝国
モンゴル帝国は、武力でユーラシアを征服しさと思われているが、実際には外交を通じて平和的に各地を従わせることが多かったようである。14世紀のサハリンでは、アイヌの人たちが持ってくるオコジョの毛皮を小屋に入れておいて、野人といわれる人たちが持ってきた中国製品と交換するということが行われていた。野人というのは、アムール川の下流域やサハリンに住む、オルチャやウィルタの人たちと同じことばを話す人たちだったと考えられている。このように、アイヌの人たちと野人とは会わないで交換をしていた。このような方法を沈黙交易という。

写真Ⅱ－5：サンタンゴズ地図
1809年に間宮林蔵が船でアムール川を下り、ティルの丘を絵にかいた。1413年と1433年に建てられた2つの石碑が描かれている。

写真Ⅱ－6：ヌルガン都司が置かれたティル村
写真中央部が、永寧寺が建っていたティルの丘。19世紀までは2つの石碑もここに建っていた。

明のアムール川下流域への進出とアイヌの人たち

14世紀に明が成立して、元の勢力はモンゴル高原に退いた。明は、大きな船をつくってアムール川を下り、アムール川の下流域にヌルガン都司という役所を置いた。また、永寧寺（えいねいじ）という寺を建てて仏教を利用して先住民の人たちを支配しようとした。明は、アイヌの人たちと戦うことはなく、貢ぎものを取ることでアイヌの人たちを支配しようとした。同じ時期には、鄭和（ていわ）の艦隊がインド洋で活躍している。

しかし、15世紀の半ばになると、明は大艦隊を送ることはしなくなり、東アジアの海上交易は小さくなった。アムール川の下流域でも、明の朝貢（ちょうこう）交易はしだいに小さくなった。また、永寧寺が焼かれるなど、仏教を利用した明の統治は、先住民の人たちからは受け入れられなかった。

写真Ⅱ－7：1433年に建てられたヌルガン永寧寺碑。
現在はロシア連邦のウラジオストク市に移されている。クイの都司に来たので、衣服などの品物を与えたということが石碑に刻まれている。

倭寇　明の永楽帝（えいらくてい）は、各地に使節を派遣して、貢ぎ物を持ってくるように促した。日本からは室町幕府の足利義満の使節が、明に行き国交を開いた。これ以降、明と日本との間で勘合貿易（かんごうぼうえき）が行われた。インド洋に派遣された鄭和の艦隊の一部は、アフリカにまで行き、ネリンを中国に連れて行った。アムール川の下流域に行ったのは、鄭和の同僚のイシハが率いる軍隊であった。明の拡大政策は、1430年代まで続いた。14世紀に明が成立すると、モンゴル帝国や元の時代に許されていた自由な交易を、制限しようとした。そのため、15世紀には倭寇という武装した海上交易者が海賊行為を行うようになった。倭寇のなかには、日本人のほかに中国人や朝鮮人が加わっていた。